

ドカーンと響く衝撃音で飛び起きた。時計を見ると9時3分。アパートにクルマでもぶつかったかと思うほどの異常を感じた。この日はニューヨーク市長予備選挙の日。二期目を終えるルドルフ・ジュリアーニ市長に続く市長候補を、民主党と共和党が選び、十一月の市長選に備える日だった。

夫のピート・ハミルは、朝8時から、市庁舎の隣にある「ツイード・コート・ハウス」でニューヨーク市歴史協会のミーティングがあり、外出していた。今年四月から、「ニューヨーク・デイリー・ニューズ」紙のコラムニストに復帰した彼は、毎週月曜日掲載のコラムを書いている。今日は予備選について特別一本書くことになったので、ミーティングの後、その足で取材にまわると言っていた。ところが、そのピートが突然帰ってきて、アパートの入り口で叫んでいた。

「ワールド・トレード・センター(WTC)にジェット機がぶつかった！　いま南タワーの爆発を見た。テロに違いない」

彼は現場へ駆けつけるため、ニューヨーク市警発行の「ワーキング・プレス」パスを取りに帰ってきたのだった。このパスがないと警察のバリケードを越えて現場に近づけない。

「待って、一緒に行くから」

彼が新聞社に電話している間、わたしはジーンズに着替え、スニーカーを履き、野球帽をかぶって、長袖のジャケットをつかんだ。

表に出ると、昨晚の雨が上がって見事な快晴だった。隣のアパートに住むリンダが、二人の子供の手を引いて帰ってきた。蒼白な顔で言葉もない様子。彼女は世界貿易センタービルから、ほんの四ブロック北にある学校へ二人を迎えに行つて戻ったところらしい。ブロードウェイに出ると、消防車やニューヨーク市警のクルマが、大きなサイレンを鳴らしながら南へ突進していく。歩道にはたくさん勤め人が逆方向の北を目指して歩いていた。携帯で話しながら歩いている人、公衆電話に並んで家族に連絡しようとしている人。わたしたちは彼らとは逆方向の南を目指し、走るような勢いで歩いた。ブルーの青空がまぶしい。

ピートはニューヨーク市歴史協会のミーティングの席上、大きな音を聞いたという。8時48分だった。とはいえ、ニューヨークで衝撃音など聞き慣れたもの。数分後に職員がミーティング・ルームに飛び込んできて、

「アメリカン航空のジェット機がワールド・トレード・センターのタワーのどっちかへぶつかった！」

と叫んだ。彼はすぐ荷物をまとめると、市庁舎北側の目抜き通り、チェンバーズ・ストリートへ出た。その瞬間、9時3分、南タワーが爆発して、オレンジ色の炎が噴き出た。巨大な爆発だったという。

ワールド・トレード・センターはわたしたちのアパートのある通りから十三ブロック南に位置する。ブロードウェイを三ブロック下ったところで、わたしは煙を吐くツインタワーを初めて目撃した。雄々しく立ち伸びる見慣れたタワー。まるでグローバル・エコノミーを支配する米国の強さを象徴するような、桁外れに大きな二本のタワーが、哀れにも凌辱された姿である。

さらに五ブロック下がってチェンバース・ストリートに立つと、オレンジ色の巨大な炎を噴出させる両タワーがよく見えた。市庁舎に沿ってさらに南下。現場に近づいたので警官の数が多くなり、ブルーのバリケードをトラックから下ろしたり、急行した緊急車両へ指示を与えている。

貿易センタービル of the 北側に位置するベッシー・ストリートへ右折しようとしたところで、警官に制止されたが、ピートが市警の「ワーキング・プレス」パスを見せるとすぐ通してくれた。パスのないわたしは止められるかと思ったが、チェックもされなかったので、何食わぬ顔でついていった。

* 「これで十四人目だ」

ベッシー・ストリートをそのまま西方向へ一ブロックほど進んで、チャーチ・ストリートに近づいた。ベッシー・ストリートとチャーチ・ストリートの交差点は、貿易センタービルの北東角に当たり、全貌が見渡せた。灰色に黄色の混ざった鉛色の巨大な煙が真つ青な秋空を覆い、東のブルックリン方向へ流れていた。ツインタワーのスチール製外壁が朝日を浴びて銀色に輝き、南タワー（WTC二号館）では真中より少し上の階、北タワー（WTC一号館）ではそれより上階近くに大きな穴が空いている。穴のまわりは焼けただけ、どす黒い傷口をさらけ出している。そこから勢いよく黒い煙が上がっていた。

ベッシー・ストリートには、灰をかぶったハイヒールや靴が散らばり、すでに変色した血痕が落ちていた。書類の詰まった黒い仕事カバン、朝食用に買ったらしいパンの入った紙袋、そしてジェット機の中核部分と思われる焼けた丸い鉄が転がっていた。

通りには知り合いのカメラマンやリポーターが数名いた。

「ジャックの息子、ジョーだよ」

カメラを手にした若い青年に向かってピートがこう言った。ピートの友人のジャック・メーナードの息子である。十数年前フロリダで会った時は、まだ八歳くらいの子供だった。それ以来会っていなかったの、背の高い青年に成長しているジョーを見て、わたしは思わず微笑んだ。まあ、こんなに大きくなったの、というわたしの気持ち伝わったのだろう。彼ははにかんだ顔で応えた。その時女性警官が、全員、黄色いテープまで二メートルほど下がるように、と指示してき

た。

北タワーの燃える窓から白いシャツを着た男性と思われる小さな人影が飛び降りていった。人影はWTC五号館の屋根の上に落ちていった。

「これで十四人目だ。何て気の毒な奴だ！」

隣の警官がこうつぶやいた。

いま、この瞬間にも、タワーに閉じ込められた人たちは、わたしの立つこの地上へ戻りたいとどれほど切望していることか。どれほどの恐怖に襲われ、どれほどの絶望感にさいなまれていることか。彼らの気持ちを考えると、神に祈りたい思いだった。うまく逃れたのだろう、上半身裸の男性が放心したように歩いてきて、ブロードウェイ方向へ向かっていった。

この時、わたしの隣にいた二人の警官のひとり、携帯電話から耳を離すと相棒にこうつぶやいた。

「信じられるかい、ペンタゴンにも飛行機が突っ込んだって、母さんが言っているぜ」

隣の警官は続けてこう唸った。

「ハイジャックされた別の飛行機がまだどこにいるか、わからないって……」

わたしは自分の携帯を取り出し、この情報を確認しようとした。なかなか繋がらない……。その瞬間、南タワーの上階部分で大きな爆発が起こり、巨大な煙が上がったかと思うと、こんどは鉛色のその煙が、こなごなに砕けたタワーの外壁や鉄骨、窓ガラス等などの残骸をきらきら銀色に輝やかせながら、わたしたちの頭上めがけて落下し始めたのである。何が何だかよくわからなかったが、巨大なタワー全体が襲ってくるような感じだった。わたしは全速力で走った。

「ゴー！ ゴー！ ゴー！」

警官が叫んでいる。ブロードウェイまでの十メートルがずいぶん長く思えた。

「レフト！ レフト！ レフト！」

警官がまたこう叫んでいる。

ブロードウェイを左折すると建物の陰になったので少しほっとしたが、後ろを振りかえる余裕はなかった。みんな猛烈な勢いで走っている。

チェンバース・ストリートに近づいてやっとなり返って見ると、後ろから続いていると思っていたピートがいない。

「ゴー！ ゴー！ ゴー！」

警官がまた叫んでいる。

さらに三ブロック、ブロードウェイに沿って建つ連邦政府ビルまで走り、また振り返った。こんどは止まって、走る人たちをひとりひとり確認した。ピートの姿はない。取り残されたのだろうか。戻るべきだろうか。その時、後ろから数名の警官が足音をとどろかせながら走ってきた。ひとりが叫んだ。

「こんどは連邦政府ビルだ。逃げろ！」

別のジェット機がこのビルも襲ってくるというのか。わたしは四十階ほどの建物を右手に見上げ、さらに全速力でまっすぐ自宅のある通りまでたどり着いた。

アパートの入り口では、子供の手を引いて出てきた上階の住人、エリザベスと出くわした。隣のリンダと子供たちも、着の身着のまま、泣きじゃくりながらエリザベスに続いている。

「もう怖くて……脱出するしかない」

こう叫ぶエリザベスに、どこへ行くのと尋ねると、

「北へ」

とだけ答えた。いつも身綺麗にしている英国人のエリザベスは、まるで人が違ったような顔つきだった。リンダの顔つきはもつと崩れている。わたしはリンダの夫トミーがトレーダーで、オフィスはワールド・トレード・センターだったことを思い出した。

* 「脱出するしかない」

ブロードウェイでは、貿易センタービルから少しでも離れようとする人たちが群集となつて、北を目指していた。大人も、子供も、政府職員も、ビジネスマンも、まるで難民のように緊急避難である。

わたしは、取り敢えず、アパートへ戻ってみた。エレベーターを降りて鍵を開けると、ピートは帰っていない。喉がからからだったので、水を飲み、テレビをつけた。オレンジ色の火を噴いて青い空に立つのは一本のタワーだけ。南タワーは崩れ落ちました、とキャスターの声が聞こえた。わたしは一生後悔してもしきれない間違いを犯したか、と背筋の凍る思いだった。何故、ピートが後ろからちやんと走ってくるか、振り返って確認しなかったのか。小学生のときから足の速かったわたしが、ひとりだけ逃げ出してしまい、夫を置き去りにしてしまったのだ。そう思う一方、新聞記者として四十年以上の経験のある彼は、どんな状況でも生き延びるに違いない、とも思えるのだった。取り敢えず、彼を捜しに現場方向へもどってみよう。

四階からまた玄関ホールに下りて、アパートの扉を開けた。その瞬間、捜していた顔が、灰まみれで現れたのである。わたしは彼に飛びついた。

ピートは走ろうとした瞬間、危険を察知した警官に後ろから止められ、ベッシー・ストリートに面した古い建物のなかに押し込められたという。数分後、建物は大きく振動した。トレード・センターから襲ってきた灰や瓦礫に直撃されたのである。それがおさまると、カメラマンのジョーや警官、消防士はいても、わたしがいないことに気付き、狂ったように探し回ったという。表へ出ようにも、衝

撃で扉が開かなくなっていた。地下に下りて通用口を捜したり、灰で顔も見分けられなくなった消防士に水を運んだり、閉じ込められたのは十四分。最後に警官が斧でガラス窓を破り、全員、退去したというが、その十四分間がずいぶん長く思えたという。

表へ出ると、ベッシー・ストリートには白い灰が三センチも積もっていた。通りも建物も市庁舎もすべて白い灰に覆われ、紙が至るところに吹き飛んでいた。株のオーダー表、報告書や請求書など、米国資本を大きく動かす金融の中心だったあらゆる証拠。その灰と紙片にまみれる通りにわたしの姿を捜し、自宅へ電話しても繋がらず、警官に緊急避難所はどこか聞いてみたりしたというが、何はともあれ、帰ってきたのだった。

わたしたちは部屋へ戻って、テレビをつけた。燃え上がるペンタゴンの映像を見て、あの警官の言葉が本当だったことが初めてわかった。ジェット機がペンシルベニアに墜落、とテロップが流れる。

ジュリアーニ市長は十四丁目以南のロワー・マンハッタン全域をウオー・ゾーンとして閉鎖したという。交通は遮断され、クルマはもちろんのこと、住民ですら、この地域に外から入ることは禁止されることになった。現場にもっと近いキヤナル・ストリートではさらに厳重な警戒網が敷かれた。唯一、ウオー・ゾーンに入れるのは「ワーキング・プレス」パスをもつ記者のみ。

* 八十二階から生還

アパートのなかには匂いもないし、電気、ガス、水道もしっかり使える状態だった。朝から風が東向きだったので、煙はすべてブルックリン方向へ流れていたことが幸いした。

「わたしたちも緊急避難した方がいいかしら」

夫に尋ねると、

「まず、一本書いてからだ」

シャワーを浴びて灰を落とすと、コンピュータの電源を入れ、キーボードを叩き始めた。わたしはまずニューヨーク州北部に住むピートの娘エイジュリンに電話した。

「二人とも無事よ」

わたしの声を聞いた途端、彼女は電話口で泣き始めた。

「何度も電話したのに、繋がらなかった……本当に心配で心配で……」

長女のエイジュリンは四年前に結婚し、三歳になる息子と夫とともにニューヨーク市から二時間ほど北の小さな街で暮らしている。わたしがベッシー・ストリートから携帯で連絡を取ろうとしたのは、彼女だった。あの時間、家にいること

がはつきりしていたからだ。ピートのもうひとりの娘ディアジュラは、アリゾナ州フェニックスで新聞社のカメラマンとして働いているが、前日、休暇でパリに発ったところだった。

次に連絡を入れなくてはならないのは、わたしの両親だった。東京へ電話すると、いつもの発信音がして問題なく繋がった。

「いま、貿易センタービルが崩れ落ちて、たいへんなことが起こったけれど、二人とも無事だから、心配しないで」

電話口の母は、わたしが何を言っているのか、さっぱりわからない様子。テレビのチャンネルを変えたらしく、

「あら、やっているわ……」

とのんびりした調子。あのビルの下まで行っていたけれど、走って逃げてきたと言うと、

「あなた、何でそんなところへ行ったの」

わたしはその質問に答えず、大丈夫だからと言って電話を切った。ピートの妹キヤサリーンがトレード・センターで働いているのではなかったか。

「ああ、彼女は数カ月前からニュージャージー勤務になったはずだよ。でも、スタテン島の自宅からニュージャージーのオフィスへ通うのに、毎朝、トレード・センターの地下からパストレインを使っているはずだ」

パストレインというのは、トレード・センターとニュージャージーを結ぶ電車である。ハドソン河下のトンネルを通過するので、トレード・センターの地下深くにプラットフォームがある。

ピートは妹の自宅へ電話してみたが、回線がいっぱいで繋がらなかった。

さて、避難するには何をもっていけばよいだろう、と考えた。あまりたくさんものは持ち運べないだろう。バックパックを取り出し、二人のパスポート、銀行小切手を数枚入れてから、コンピュータに電源を入れた。わが家の会計プログラムを開け、すべての口座をフロッピーにバックアップし、執筆中の本の原稿もフロッピーにコピーした。そのほかカメラとフィルム、テープレコーダーとテープと電池。それにピートが前の晩、ついに完成させたニューヨークの歴史に関する小説もフロッピーに入れてもっていかなくちや。ほかに何が必要だろうか。

その時、電話が鳴った。

「入れなくなつた。いまキヤナル・ストリートにいる。ワーキング・プレス、パスをわすれたら、バリケードを通してくれない」

さつき、一本書くといつて座った途端、タバコと飲み物を買に出た夫だった。全くこの期に及んで、何という人だろう。わたしは彼の「ワーキング・プレス」パスをつかむと再びエレベーターで玄関ホールに下りて、扉を開けた。

リンダの夫トミーが驚いたように突っ立っていた。トレード・センター八十三

階からひよっこり生還した姿に出くわしたのである。

「あそこにいたんだ！」

彼はひとことこう呟いた。まるで家に帰ってきたことが信じられないとでも言うような顔つきで、灰まみれだった。

わたしはブロードウェイに出て、キャナル・ストリートに近い閉鎖バリケードの手前で「ワーキング・プレス」パスを高く振り上げた。バリケード付近には荷物を持って避難する人が列をなす一方、家族を残した人たちだろうか、こちらに入ろうとして制止されている人たちが溢れていた。

「このあたりは緊急避難地域だから」

誰かの声がする。

警官にさえぎられるようにしてピートが飛んできた。制止する警官にプレスパスを見せると、ようやく入れてもらえた。

「何で避難しなくちゃいけないのですか」

わたしは警官に聞いてみた。

「……匂いだよ」

投げやりにこう言うと、若い警官は忙しそうにわたしを振り切った。

「どうもガス漏れを心配しているらしい。あの爆発の後、ガス管がやられたかもしれない。ジュリアーニはもう全域のガスを止めただろうが……」

ピートがこう言う。ということは、ガス漏れでこの地域も火に包まれるのだろうか。

*貿易センタービル足元

通称トライベッカと呼ばれるこの地域は、キャナル・ストリートをはさんでソーホーの南、チャイナタウンの西隣にあり、いま、ニューヨークでもっともヒッピーな地域のひとつとして知られる。ロバート・デ・ニーロやハービー・カイテルが住み、亡くなったケネディ大統領の息子もこの住民だった。デ・ニーロの経営するNOBUなど気の利いたレストランも多い。それより何より、わたしたちがトライベッカからバッテリー公園に続く、マンハッタン南端のこの地域が気に入ったのは、ここにはニューヨークの歴史が色濃く留められているからである。

アメリカ合衆国の歴史が首都ニューヨークから始まったことは、余り語り継がれていない。一七八九年四月三十日、ジョージ・ワシントンが初代大統領の宣誓を行ったのは、ウォール街に現存する「フェデラル・ホール」である。わたしたちが立っていたベッシー・ストリートの南側には、独立戦争前から現存するマンハッタンでいちばん古い教会、「セント・ポールズ・チャペル」が静かに佇んでいる。「フェデラル・ホール」で初代大統領の宣誓を行ったジョージ・ワシントンは、

その日、この教会で市民の感謝に応えるセレモニーに臨んだ。いまでもこの教会には、その時、ワシントンが座った椅子がそのまま残されている。

ブロードウェイには「トリニティ・チャーチ」も残されている。ピートが朝、ミーティングに出かけた「ツイード・コート・ハウス」は、一八七八年に完成したニューヨーク市裁判所で、一九二六年まで裁判所として使われた。ニューヨーク市の歴史を執筆中のピートに、これほどふさわしい住処もないと言ってわたしたちは喜んだ。

一九九七年秋からこの地域に住み付くようになったわたしたちは、はじめチャーチ・ストリート一四九番地のロフトを借りていた。チェンバーズ・ストリートから南のウォレン・ストリートに至る一ブロックを占める大きな四階建ての建物で、一階には韓国系食料品店、インド系のカバン屋、パキスタン系のエスニック料理店、ベトナム系の雑貨屋、アイルランド系のコピー店など、人種の坩堝ニューヨークをそのまま象徴する雑居ビルだった。

住み始めてみると、わたしたちはこの地域がいかに便利かを痛感した。マンハッタン島の南端なので、ほとんどすべての地下鉄が使える。「シティ・ホール」駅からはブロードウェイ・ライン、「ブルックリン・ブリッジ」駅からはレキシントン・ライン、「ワールド・トレード・センター」駅からは八番街に向かってまっすぐ走るEライン。

わたしたちはワールド・トレード・センターの足元で、ツインタワーを毎日、仰ぎ見ながら生活するようになったのである。トレード・センターが近いというのも、大きな利点だった。ここには四百三十五社がオフィスを構え、七十軒のレストランやブティック、スーパーなどの店がある。平日の就業人口は五万人といわれ、訪ねる人は八万人。十六エーカーの敷地に、百十階の超高層タワー二棟と五つの低層ビルがあり、一号館から七号館まで合わせると一大都市の機能をもっていた。

チャーチ・ストリートを下ると、ベッシー・ストリートを越して、WTC五号館にすぐ入れる。ここには大型書籍チェーンの「ボードーズ」があった。わたしはよく「ボードーズ」へ入ってから地下に下り、地下一階フロアで買い物をした。パン屋さん、ピザ屋さんばかりでなく、「めんちゃんこ亭」ではランチ用寿司パッケージを売っていたし、ラーメンやおそばも食べることができた。このほか、ドラッグストアから、時計店、雑貨店、さらにカバンのCOACHやTシャツやジーンズで知られるJ・CREWなどブランド店も並んでいた。各銀行の支店や航空会社のカウンターがあるので、緊急に駆けつけなければならない時には、本当に便利だった。あんまり広いので初めは面食らったが、ここへくればすべて用事が足りたのである。

二年後には、さらに八ブロック北の通りに古いロフトを購入した。五階建ての

建物の四階全フロアである。コアアップといって建物全体を各階一所帯が共同で所有するシステムなので、五所帯は同じ屋根の下に住む大家族のようなものである。エレベーターは隣の建物と共有しているから、四階に下りると左が我が家、右が隣のリンダとトミーのアパートになる。

移り住んでから、天井まで届く大型本棚やクローゼットを作りつけ、窓を新しくし、温水による暖房システムを取り入れ、ようやく落ち着いたところ。ここが火災にでも遭ってしまったら、蔵書や資料など、わたしたちはすべてを失うことになる。

「一本書く」はずの夫は、わたしから「ワーキング・プレス」パスをつかみ、その足でブロードウェイに一軒だけ開いている韓国系食料品店「ニュー・ファンシー・フード」に足を向け、帰ってくるなりこういった。

「あそこのキャッシャーにいるキムさんが、店の若い娘にこういつていたよ。『死ななきゃならないなら、ここで死ぬのよ』って。彼女は本当にタフだね」

韓国人はいま世界中でいちばんよく働いているというが、彼らの勇猛さと逞しさには心底頭が下がる。キムさんのいう通りである。このロフトが火災にでも遭うものなら、しつかり見届けておこうと、わたしは腹を決めた。